

# 労働者の生活世界の再生産過程における 「階級」カテゴリー

——イギリス「社会イメージ」研究からの視座——

奥村 隆

「階級」という概念は、日常生活をするひとびとにとって「主観的」にどのようなものとして構成されるのであろうか。本稿は、労働者が、客観的「階級」概念に対応する「階級」カテゴリーを主観的に構成するのはいかなる場合であり、いかにしてであるのか、また、これを構成しない場合はいかなるものであるのか、を問題とする。「階級」カテゴリーは、生活様式全体のなかに位置づけられ、ひとびとが生活世界を再生産するためのひとつの「装置」として働いている、と把握することができる。このような視座から、イギリスにおける「労働者の社会イメージ」研究の成果を再構成し、4つの労働者の類型についてその生活様式と「階級」カテゴリーの構成・非構成の様相を具体的、経験的に描き出すことで、この問題に一定の解答を得ることができよう。

## 1. 問題の所在——主観的カテゴリーとしての 「階級」

「階級」という概念、これが社会学者にとってなじみの概念であることはまちがいない。たとえば、マルクス派の社会学者たちは、生産関係において、生産手段の所有者が非所有者である直接生産者を、権力的に管理・統制し、保持している知識の差にも支えられながら、後者の生産する剰余を領有・搾取することによって生じる、物質的に不平等な資本家—労働者という客観的位置を「階級」と定義し、この概念によって社会の構造を分析してきた。<sup>(1)</sup> これは、資本主義社会の主動因たる資本蓄積過程と結びつき、マクロな社会構造を一貫した論理で説明することを可能にする、「階級」の「本質」を抜き出した概念といえよう。このような「客観的」な「階級」概念が、社会を観察する社会学者によって構成されているのである。<sup>(2)</sup>

それでは、「階級」とは、社会のなかで生活するひとびとにとっていかなる意味をもつのだろうか。それは、社会学者のもつ概念と同じ意味をもつかもしれず、あるいは別の意味をもつかもれない。また、それは、つねにひとびとの生活のなかに現実的なものとして現れる概念なのだろうか、それともほとんどの場合問題とはならないものなのだろうか。これは、日常生活をするひとびとによって構成されるものとして「階級」ととらえるという問題設定であり、「主観的」構成概念としての「階級」がいかなるものか、を把握しようとするものである。ひとびとは「階級」という概念をどのようにして自分たちで形作るのだろうか。そもそも、ひとびとにとって「階級」とはなんなのだろうか。<sup>(3)</sup>

これらの問いは、社会科学において、従来必ずしも十分に展開されてきたものではなかったといえよう。しかしながら、私はこれが問うに値する重要な問いだと考える。現代の先進資本

主義社会において、とくに私たちの生きる日本社会において、労働運動の停滞や政治的な保守化は、「階級」という概念が、必ずしも多くのひとびとに抱かれてはいないことを示唆している。ひとびとはなぜ「階級」という概念を抱かないのか、という問いが、この社会を客観的に「階級社会」とであるととらえる立場にとって重要なものとなるだろう。いや、むしろ、いったいどのようにしたら、ひとびとは「階級」という概念によって社会をとらえるようになるのか、という問いがこの立場にとって今日ではより切実なものとなっているかもしれない。

つまり、客観的に、労働者の搾取という「階級」関係が存在するとしても、労働者が連帯の意識をもち、他の「階級」と敵対して、組織化された主体となるとは限らない。後者、すなわち、いわば「主体としての『階級』」の存在は客観的「階級」の存在からアприオリに導きだせるものではなく、むしろ歴史的に稀有というべきであって（たとえばマルクスが生きた時代はそのような状況であったろうが）、その存在条件が経験的に検討すべきなのである。<sup>(4)</sup>そして、ひとびとの抱く主観的「階級」カテゴリーが客観的な「階級」構造に対応しているのか、それともなんらかのズレを伴うものなのか、という問いは、この条件を解明するという課題にとって重要な一歩となるであろう。<sup>(5)</sup>

こうして、私は本稿の問題を以下のように設定する。ひとびとが、先に述べたような客観的「階級」概念に対応した「階級」カテゴリーを、自分の生きる社会の状況を定義し、現実を構成するさいに利用するのは、そのために「階級」というカテゴリーを主観的に構成するのは、どのような場合であり、どのようにしてであるのか。また、このような「階級」カテゴリーを利用せず、客観的「階級」概念と対応しない別の

カテゴリーによって社会の現実を構成するのは、すなわち「階級」というカテゴリーを主観的に構成しないのは、どのような場合であり、どのようにしてであるのか。ここでは、前の場合を主観的「階級」カテゴリーの構成、後の場合を「階級」カテゴリーの非構成と呼ぼう。そして、ここで「ひとびと」とは、労働者、とくに主としてマニュアル労働者を対象とすることにする。労働者がいかなるカテゴリーを構成するか、は先の課題にとって重要な問題であり、そこでは、労働者という「客観的」には同一の「階級」的位置にいるひとびとが、ある場合には「階級」カテゴリーを構成し、ある場合には構成しないという事態が具体的・経験的に検討されねばならないのだ。

さて、本稿では、この問題を1960年代を中心とするイギリス社会のさまざまなモノグラフに基づいて検討していくことにする。これにはいくつかの理由がある。まず、イギリス社会が伝統的に「階級社会」であり、「階級」カテゴリーが構成される状況を典型的に示しているだろうから、あるいはマルクスが見た稀有の状況を受け継いでいるからである。また、この時代には、現在まで続く「ゆたかな社会」といわれる状況が始まっており、それにとまなう「階級」カテゴリーの非構成を観察することができるからである。そして、これらの状況に直面してイギリスの社会科学は「階級」にたいする「独特の柔軟な見方」(庄司, 1982:29)を展開しており、そのなかに「労働者の社会イメージ」研究という伝統を生み出しているからである。階級・地位の不平等が現存する社会を労働者がどのような主観的に認知・評価するか (Bulmer, 1975:3) を問題にするこの伝統は、本稿の問題と重なる領域を扱っているのだ。

それでは、この研究を中心とするモノグラフ

を再構成していった本稿の問題を解明しようとするとき、私はいかなる視座をとるのか。この研究の伝統をどう受け継ぎ、どう展開させるのか。<sup>(6)</sup> 私なりの、この視座を次に明らかにしなければならない。

## 2. 問題への視座——「生活世界の再生産」における「階級」カテゴリー

イギリスにおける「労働者の社会イメージ」研究は、エリザベス・ボットの『家族と社会的ネットワーク』の第6章「諸規範とイデオロギー——階級の諸概念」に大きく依拠しているといわれる。ここで、私は、その論述を参照することから、視座を提示していきたいと思う。ボットはこう述べている。「階級についてのイデオロギーの構成要素、原材料は、個人の社会経済的カテゴリーでの位置よりもむしろ彼のさまざまな社会的経験のなかにある。……ある個人が階級について語るとき、彼は実際にメンバーとなっている集団や社会関係での権力や威信の過去と現在における経験を、ある象徴的な形で語ろうとしているのである。」〔Bott, 1957:163〕

ここで、注意すべきなのは、まず、「階級」カテゴリーは、日常生活でひとびとが出会う経験のなかで主観的に形成されるということである。その経験が「多種多様で相互に結びつけにくい威信や権力の経験、他のひとびとについての不完全な知識」〔ibid:165〕であるからには、ひとびとが実際に抱いている「階級」カテゴリーは、多くのばあい曖昧で断片的なのであり〔Bulmer, 1975:5-6〕、客観的な社会経済的位置と一致する可能性は限られているとみなければならない。ひとびとの日常生活での「社会的経験」が問題であり、これがひとびとの「階級」カテゴリーという現実構成を限界づけるのであ

る。

しかし、第二に、このカテゴリーは経験をたんに反映し、受動的に受容したものでもない。すなわち、「階級」カテゴリーは「象徴的な形で」この日常生活の経験から「製造 manufacture」、「創造 create」されたものである。〔Bott, 1957:165〕これは、主観の能動的な過程によって構成されるものであり、そこには個人的な「必要」や「願望」が入り込むのだ。〔ibid:191〕というのは、「階級」カテゴリーはひとびとが社会全体への方向づけや、他者や自分の評価、位置づけといったさまざまな「目的」〔ibid:191〕を果たすための「とりあえずの手段 a rough-and-ready means」〔ibid:165〕だからであり、そのゆえに、このカテゴリーは非論理的でも一貫していなくてもひとびとにとってはかまわないのであり、この意味においても「変形は不可避」〔ibid:191〕なのである。

この「階級」カテゴリーの目的論的ともいえる能動的な構成の性格を、私は以下のように考える。ひとびとの生活は、自らが直面する状況のなかで、そこで出会われるさまざまな生活課題を解決することをめぐって営まれている。そこでは、これまでの生活の基盤となっており、これからの生活の基盤となるであろう「生活世界」を維持し再生産することがもっとも根底的な課題となっている。<sup>(7)</sup> 生活世界の再生産の様式は、まず直面する状況によって制約されるが、類似した状況であっても、個人の主観的選択によって、また共有された文化の産物として、どのような「戦略」をそのなかで生きていくのに適当なものとして選びとり、形作るか、によって異なってくる。この、所与の状況のなかで選ばれた「戦略」によって組み立てられる生活世界の再生産の様式を「生活様式」と呼ぶことができよう。

「階級」というカテゴリーの構成（あるいは非構成）も、この「戦略」の一環としてとらえることができる。自ら形作り、選びとった生活様式のもとでいまの状況を生き抜き、生活世界を再生産していくためには、社会を「階級」というカテゴリーによって把握することが不可欠であり、このカテゴリーを構成したほうが生きやすい場合がある。すなわち、ある生活様式は、生活世界再生産の「戦略」のなかに「階級」カテゴリーをひとつの「装置」として組み込むことによって営まれているのである。また、ある生活様式は「階級」カテゴリーを構成しないことで生活世界を再生産する「戦略」をとり、より生きやすくなるために別の内容のカテゴリーを適切な「装置」として作りだそうとするだろう。こうして、「階級」カテゴリーの主観による能動的な構成とは、生活世界の再生産過程としての生活様式のなかで一定の役割を果たす「主観的装置」を形成することだ、と私は考える。そして、いかなる生活様式をもつかによって、そこに組み込まれた「階級」カテゴリーやそれに代わるカテゴリーの内容は異なってくるのである。

このような視座をとることに、私は以下のような利点があると考え。 「階級」カテゴリーはいうまでもなく生産関係における搾取・統制といった現実の根ざしたものであり、この「本質」なしには構成されえない。しかし、これを構成するひとびとは、それとは必ずしも直接にかかわらないさまざまな現実を生きているのであり、それらの現実に対応しながら自らの生活様式を作り出す。政治・経済的現実や客観的「階級」についての（それを隠したり露にしたりする）イデオロギー的現実が彼らの生きる現実のほんの一部にすぎないのだ。「階級」カテゴリーは、このようななかで生み出される生活

様式に「装置」として組み込まれているのであり、だとすれば、これら以外のさまざまな現実がこの構成／非構成を左右していることになる。文化的な条件や地域社会の様態、家族の関係など、「階級」にとっては付随的とみなされる現実が、そこに生きるひとびとにとっては「階級」カテゴリーを「装置」とするかどうかにとって重要なのであり、客観的「階級」としては同じ現実（たとえば「労働者」という同一の経済的位置）にあるときでも、これらの現実の相違によって異なるカテゴリー構成をすることがありうるのである。こうして、「階級」カテゴリーの構成／非構成は、ひとびとの生活様式を生み出す現実の全体をとらえてはじめて理解されることになるであろう。これを経験的に把握しようとする方向が、この視座から展開されるのである。

同時に、「階級」カテゴリーを生活様式の全体のなかに「装置」として位置づけることは、このカテゴリーがひとびとにとって「切実」であるかぎりにおいて問題にする、という視座となる。すなわち、「階級」カテゴリーやその代わりのカテゴリーが生活世界の再生産にとって、その生活様式にとって不可欠であり、そのひとにとって不可欠なものとして日頃から抱かれているものである限りにおいて問題にするのである。「階級」カテゴリーが、そのひとにとってどれほど不可欠であり、切実であるか、どれだけ日常的にレリヴァントであるか、は従来ほとんど問題にされなかったように思われる。しかしながら、これが日常つねに利用され他と代えがたいカテゴリーなのか、それとも、日常的にはほとんどレリヴァントではないのに、たとえばアンケートという非日常的な状況でことさらに作り上げたものなのか、ということは「階級」カテゴリーのひとびとにとっての「実際の意味」

を考えるには落とすことのできない視角であるにちがいない。<sup>⑧</sup> 生活様式全体をとらえ、そこに「装置」として位置づけることは、ひとびとにとっての「階級」カテゴリーのレリヴァンス、不可欠さ、切実さを解明する、明確に定立された一視座となりうると、私は考えるのである。

以上のような、生活世界の再生産過程における主観的「装置」としてとらえる視座から、労働者による「階級」カテゴリーの構成および非構成を把握することが次節からの課題となる。私はまず次節で、「階級」カテゴリーの非構成の場合を、理念型的に描きだすことにしよう。

### 3. 「階級」カテゴリーの非構成

「階級」カテゴリーの非構成、すなわち、資本家-労働者という「客観的階級」に対応するカテゴリーをひとびとが主観的に構成しないのはどのような場合であろうか。私は、これをイギリスの労働者が示す3つのタイプに理念型化してとらえようと思う。以下では、それぞれのタイプが生まれる典型的な状況が抜き出され、そこで「階級」とは異なるどのようなカテゴリーが構成されるかが描かれる。ただし、この状況はまさに「典型的」なものであって、その状況以外でも、主観的・能動的な能作により、それぞれのカテゴリーを構成する可能性はあるだろう。それぞれのカテゴリーは、労働者の生活様式のなかのひとつの「装置」なのであり、生活様式は状況に大きく規定されながら、労働者自身によって選ばれるものだからである。問題は、「階級」カテゴリーの代わりとなるさまざまなカテゴリーが、労働者の生活世界の再生産過程に「装置」としてどのように組み込まれて不可欠なものとなっているか、それゆえに

「階級」カテゴリーを構成することが不可能に、あるいは不必要になっているか、を把握することにある。

#### (1) 伝統的服従型労働者タイプ traditional deferential worker type

まず、「伝統的」な状況において、「階級」を主観的カテゴリーとしない類型を考えよう。「伝統的」とは、社会的上昇の道がマニュアル・ワーカーにはほとんど開かれておらず、地域社会は安定したメンバーによるコミュニティであり、外の世界からは相対的に孤立しているという、社会移動の小さい状況である。〔Lockwood, 1966:254-255〕

次のような伝統的コミュニティを想定してみよう。さまざまな職業のひとびとが住むふるくからの安定したコミュニティで、メンバー同士、個々人の人格がわかるくらい十分に知り合っている。そして、同じ程度の威信をもったひとびとがサークル＝「身分集団」をつくっていて、そこへの参加は生活様式や教養を含めた人格的要素で受容・拒否されるのであり、その基準はより下層のひとびとにも理解されている。つまり、自分があるサークルに入れない理由を自覚しており、当然のものと受け取っているのだ。

この local status system に加えて、労働現場がサービス業や手工業、農業であったり、家族経営といった小規模なものである状況を考えよう。労働者はつねに雇用者と接触しており、多くの場合パターナリスティックな権威のもときわめて個人的な関係のなかに置かれる。別のサークルに属する雇用者が、自分たちの上位にいて、監督や経営の役割をはたしているのに日々触れるのである。〔ibid:253-254〕

この典型的な状況のもとでなされる社会の現実構成は以下のようなものである。労働者は、

まず、威信の違う地位の存在をはっきりと認識する。上位のひとびとは自分たちと生活様式も教養もちがい、これは自分たちがこれから努力しても得られるものではない。そして、このひとびとは「生まれつき」リーダーとしての資質をもっており「ものごとの進め方」を知っていて、階級や部分の利益ではなく国家や全体の利益を考えて行動するだろう。それゆえ、自分たち労働者は彼らに従わなければならない、従うべきであり、「服従的」となる。こう考える労働者にとって社会は、威信の違う地位が梯子状に存在するという「ヒエラルヒー＝威信モデル hierarchical prestige model」としてイメージされるだろう。そのヒエラルヒーは自分たちが個人的に上っていける梯子ではなく、上位の威信・地位は努力しても達しえないものである。

[ibid:252] こうして、労働者は、威信を基準にした階層というカテゴリーを、主観的に構成することになる。<sup>(9)</sup>

しかしながら、この、上下の移動がほとんど想定されないカテゴリーは、労働者に、自分は能力がなく努力してもなにも得られないという意識や自己犠牲という感覚を与えてしまうのではないだろうか。そこで、彼らがどのようにして、生活様式のなかにこのカテゴリーを「装置」として組み込み、このような感覚をもたずに生活を生きやすくしているか、を把握せねばならない。

このモデルは、まず、次のような考えへと展開する。すなわち、社会はさまざまな部署からなる有機的な統一体であって、それぞれの部署が自分の職務を果たさなければ成り立たない。その職務はいかにみすばらしくみえても社会全体にとって不可欠なものである。ひとにはそれぞれ向き不向きがあって、指導的な職務に向いているひとといれば、いまの自分の仕事（肉体

労働）に向いているひともいて、これは避けられない事実だ。だから与えられた自分の職務を果たすことが、自分にとって相応しいことだし、社会のためになっているのだ。[Parkin,1971:85] こうして「分を知る know his place」[Lockwood,1966:254] ことから自尊心を紡ぎ出すことが「装置」としての第一の働きとなる。

もうひとつの「装置」は他の労働者との関係にある。労働者の「分」とは、リーダーに従って社会のために自らの職務を果たすことであり、それを果たすことが自らの「威信」なのだ。ところが、リーダーに反抗してばかりいて職務を果たさない労働者がいる。彼らは社会のなかでの責任を果たさず、社会に貢献していないやつらだ。このような労働者は、威信ヒエラルヒーにおいて自分たちより下位に位置づけることができるのであり、彼らと比較して自分のほうが職務を果たしている、あるいは端的により上だという意識が自尊心を守るのに役立つ。威信ヒエラルヒーを受け入れるとき、自分より下の地位を発見することが不可欠なのであり、服従型の労働者にとって「不服従」な労働者がこれを提供するのである。[ibid:252-253]

このようにして、威信による社会のカテゴリーは生活をしやすくする「装置」として働くことができ、これを組み込んだ形でこの労働者の生活様式が成り立っている。すなわち、労働者としての「分」を守って職務を果たし、威信階級における上位者との関係によって生活の安定を支えていく「伝統的」で「服従的」な生活様式である。「客観的」階級構造、あるいは不平等構造の下位にいる状況のなかで、彼らはこの生活様式を選びとったのであり、これによって生活世界を再生産しているのだ。この生活様式が上位者との連帯を中心とするからには、マルクス派的な「階級」がここに入り込む契機はほと

んどなく、以上のような社会のカテゴリーは「装置」として不可欠とされているのであるから、この生活様式を営むかぎり他のカテゴリーと代替されるのは困難であるといえよう。

## (2) 中産階級タイプ middle-class type

以上の「伝統的」状況に対して、労働者の「ブルジョワ化 *embourgeoisement*」が問題になるような「ゆたか」な状況が1960年代以降進展している。そこでは、これからみるふたつのタイプの妥当性のほうが高くなっているように思われる。その第一が、労働者が中産階級のイデオロギーを内面化するというタイプであり、これを主張するのが「ブルジョワ化」仮説である。

中産階級のイデオロギーとはいかなるものであるのか。「中産階級であることは資本主義社会の支配的意味システムを内面化しているということである」といわれるこのイデオロギーの内実は「競争的個人主義の徳の強調」にある。

[Benson, 1978:108] すなわち、個人が達成するものは結局のところ彼が自分自身で作り出したものに依存するのであり、できるかぎり世の中で成功するよう努力し、自分の生活とくらしむきには自分で責任をとるのが義務だ、というものである。個人の達成に最大の価値が置かれ、これこそがそのひとの徳を示すと考えられる。社会的地位・威信が上昇し、収入と消費水準が高くなり、生活が改善されること、これが永続的に（個人的にも世代的にも）続くことをひとびとは期待するのであり、そのためには先を見越した計画をたて、必要とあらば後の利得のためには現在を犠牲にすることもいとわない。

[Goldthorpe et al., 1969:120-121] <sup>(10)</sup>

とすれば、労働にたいしては「官僚的志向 *bureaucratic orientation*」を持つことになる。労働は、地位と収入の上昇と長期的安定、つま

りキャリアを見返りに、組織に奉仕することととらえられる。これは一方で組織にたいする道徳的な関与を生み、他方で労働にたいする強い自我包絡を生む。すなわち、彼の地位や収入が彼の社会的アイデンティティの重要な源泉であり、それを生み出すのが労働であるのなら、労働は生活の中心的関心事となる。労働以外の生活領域も、生活の中心である労働に縛られ続けるのはけだし当然であろう。[Goldthorpe et al., 1968a:39-40] こうして、労働を中心に、とくに職業的地位の上昇を支えとして、生活世界を再生産する生活様式が営まれることになる。

このような生活様式によって生きるとき、社会はどのように構成されることになるのだろうか。この生活様式が成り立つには、能力と決断力や忍耐といった徳があればだれもが社会の梯子を上ることができ、その上昇は努力次第でどこまでも広がりうるという条件があるのだと認知していることが必要である。また、その個人の能力と努力によって獲得する生活と威信は明確な差異をもっていなければ自己確証をもたらす目標とならず、その差異をもつ段階のヒエラルヒーがひとつながりの成層をなしていると認知せねばならない。[Goldthorpe et al., 1969:120]

<sup>(11)</sup> こうして、社会は「伝統的」タイプとは違った意味での「ヒエラルヒー=威信モデル」によってとらえられており、とらえられねばなるまい。すなわち、社会は威信に差のあるさまざまな職業的地位の成層によって成っており、同時にその成層のヒエラルヒーの間は開かれている、というモデルである。[Goldthorpe=Lockwood, 1963:146] このような威信のヒエラルヒーが、この生活様式に生きる彼らのもつ社会のカテゴリーとなるのだ。

このような社会のカテゴリーをもつのは、もちろん、キャリアを積み重ね上昇していく道が

開かれている中産階級、ホワイトカラー層に典型的であろう。しかし、低い経済的位置に置かれ不平等のなかにいる労働者も生活世界を再生産するために、この生活様式とカテゴリーを選びとる場合がある。まず、有能でアスピレーションの高い労働者が上昇移動することができるという場合である。このとき労働者が支配的意味システムを受け入れるのは容易であり、これによって労働者の有能な部分が不平等な状況を個人的に解決してしまう（労働者全体で集団的に解決するのではなく）ことになる。しかし、実際に上昇がなくてもこの意味システムを選ぶ場合もある。すなわち、「機会が開かれているのだから努力していればいつかは上昇できる、今の状態は一時的なものだ」と解釈することが、現在の地位において生活を支えていく有用な「装置」となっている場合である。これは中産階級から下降移動したひとびとに多くみられるものであり、もしこの解釈を放棄すれば、彼らは自分の今の地位が永遠のものと認めることになってしまうことになるだろう。〔Parkin,1971:50-54〕

こうして、客観的な階級関係においては搾取される位置にいる労働者が、社会を威信を基準にする開かれた階層というカテゴリーでとらえる事態が把握できる。彼は、個人主義的能力主義のイデオロギーを受け入れ、労働の場での上昇を支えとする生活様式を選びとって生活世界を再生産しているのであり、このようなカテゴリーを構成して社会をとらえることがこの生活様式を維持するための不可欠の「装置」となっているのである。この生活様式をとるかぎり、この社会イメージを放棄することは不可能であり、この生活世界の再生産の過程にも「階級」カテゴリーの入る余地はなからう。

(3) 私生活主義労働者タイプ *privatised wor-*

*ker type*

「ゆたかな社会」において、以上の中産階級タイプへと労働者が「ブルジョワ化」していくという仮説に対し、別のタイプが新たに形作られている、という仮説がイギリスでの「ゆたかな労働者」研究の結論であった。「階級」カテゴリーを構成しない第三の理念型は、「ヒエラルヒー=威信モデル」とは異なるカテゴリーを構成するものなのである。現代の先進資本主義社会に広がるこのタイプを最後に描いておくことにしよう。

「ゆたかな労働者」が「ゆたか」であるのは、大規模な工場で長時間働いているからである。大企業では、高収入であることと労働が苦役であるということが往々にして一致し、そこでのマニュアル・ジョブは断片化、標準化され、管理された魅力ないものとなる。〔Goldthorpe et al.,1969:60-64〕また、職場集団は大工場へと新しくやってきた労働者たちから形成されているので（後に述べる伝統的な職場集団とは違って）、そこでの交流は社会的な満足を得られるものではない。〔Goldthorpe et al.,1968a:52-54〕そして、地位の上昇は、さまざまな技能・資格をもつがゆえにキャリアの道が開かれているノン・マニュアルとちがって困難なことは事実であり、相当の犠牲を払って獲得されることを自覚せねばならず、大多数の労働者は今の工場労働者の地位が永遠なのだと考え、上昇を現実的なものとはみていない。〔ibid: 119-135; Goldthorpe et al., 1969: 73-77, 123〕

とすれば、中産階級のような形で労働を生活の中心、アイデンティティの源泉とし、上昇への努力と希望を支えにして生きていくわけにはいかない。ゆたかな労働者は、対照的に、労働にたいして「手段的志向 *instrumental orientation*」をとるのである。すなわち、労働その

ものや職場集団から得られる満足、報酬はもはや期待できないので、労働はその他の生活領域における満足を得るための手段としてのみとらえられ、労働に期待されるのは経済的報酬のみとなる。組織との関係も道徳的なものなどではなく、経済的報酬が得られるかいなかを計算した calculative なもの（いわゆる cash-nexus によるもの）となり、労働は生活の中心関心ではなくなって自我包絡は低く、これがそれ以外の生活に浸透していくことはない。〔Goldthorpe et al.,1968a:38-39〕

それでは、この経済的報酬がそれへの手段となる生活の中心とはなんであろうか。ゆたかな労働者にとって、それは、家庭で営まれる私生活である。家族の物質的・生活の拡充が生活の中心になる「私生活主義的 privatised」で「家族中心的 family-centered」な生活様式がここに見出されるのだ。労働が満足を与えないものであるがゆえに、家庭生活にアフエクショナルな満足を求め、その物質的条件を整え向上させるための高賃金への欲望が労働者を「手段」とわりきった形で労働に向かわせる（そうわりきれば「疎外された労働」も耐えられるものだ）。〔Goldthorpe et al.,1968b:76-78〕<sup>(12)</sup>

しかし、労働が満足を与えないとしても、必ずしも私生活を生活の中心とすることにはならないだろう。そうなるには、労働現場だけでなく次のような地域社会の状況が前提となるであろう。ゆたかな労働者たちは、その大企業での雇用のために地域的な移動を経験しているものがほとんどであり、彼らが住む地域社会はそのようなお互いに知り合っていない住民によって新たに形成されたものである。〔Goldthorpe et al., 1968a:153-154〕このような地域社会の特質（後で述べるような伝統的コミュニティの解体）は、労働者個々の移動、産業の多様化に

よって単一産業地域がなくなるといった構造的変動によって「ゆたかさ」に論理的に随伴しているといえよう。〔Goldthorpe et al., 1968b:76〕そこでは、コミュニアルな社会関係というものはなく、家族にこそ生活の中心を見出していかなければならない。〔Goldthorpe=Lockwood, 1963:153〕いわば people-centered な生活が消滅し、house-centered な生活にしがみつ়くことになり〔Young=Willmott, 1957: 154〕、夫婦の結びつきは以前よりはるかに密なものとならざるをえない。〔ibid:141〕<sup>(13)</sup>

そして、とくに、家族の「物質的・経済的水準」が、手段主義的な労働と私生活主義的な生活の中心関心となる。第一に、コミュニティの不在は、さまざまな相互扶助のメカニズムをひとびとから奪うことになり、家庭はより多くの出費を必要とするようになり、将来をみこした形で物質的水準を確保せねばならない。〔ibid: 140, 157〕第二に、この地域社会では (local status system のある伝統的地域社会とは違って) 自分や他者の地位を判断する基準は耐久消費財などの財産あるいは収入の多寡しかない。新しい隣人について知りうるのはこれだけであるし、この地域社会に住むのはほとんど賃労働者（多くはマニュアル）であって威信の差などほとんどない環境でもある。他者と差をつける「衛示的消費 conspicuous consumption」としても物質的条件は中心的関心となるのだ。

〔Lockwood, 1966:257-259〕こうして、消費水準の上昇への欲求は一定程度でとどまることを知らなくなるが〔Goldthorpe et al., 1968a: 142〕、これは、第三に、地域社会での社交がなく交流のよろこびがない彼らにとって、物質的消費が自己確証のほとんど唯一の場面であるとしたら、けだし当然であろう。<sup>(14)</sup>

このような生活様式において、社会はいかな

るカテゴリーによって構成されるのであろうか。今のべたように伝統的な形で威信を判定することはできないし、また、中産階級タイプのように労働における上昇を生活の中心におくわけではないので、威信によるカテゴリーは彼らにとってレリヴァントではない。彼らが重要視するのは、生活の中心関心であり、地域社会のなかで自分の社会的地位を位置づける現実的な基準である物質的・経済的水準なのである。こうして、ゆたかな労働者は、「金銭」を区分の第一の基準とする社会の「金銭モデル pecuniary model」を構成することになる。〔Lockwood, 1966: 256〕

このカテゴリーは次のような展開をみせる。職業威信という基準からみれば、自分たちマニュアル労働者とノンマニュアルとの間には否定できない差がある。だが、経済的水準だけをみるならば自分の周囲にいるホワイトカラーは「ゆたか」になった自分たちとほぼ同じ暮らしをしているのであって、彼らが「威信」をもっているといわれても、それは実質のない表面的な気取りにすぎない。このような、威信基準への「批判機能」によって〔Goldthorpe et al., 1969:51-152〕、ゆたかな労働者は、自らの威信の不足を最小に見積もり、自ら獲得してきた金銭を最大に見積もることができる。〔ibid:155〕  
こうして、経済的には「ゆたか」であるが、社会的には評価されない職業に従事する労働者が生活世界を再生産するための「装置」としてこのカテゴリーは働いているのである。

同時に、以下のような社会イメージが構成される。金銭を基準にすれば、自分たちとノンマニュアルとはあまり差異はなく、彼らを別の「階級」に入れることなどない。とすれば、自分は、ほとんどの賃労働者やサラリーマンを含む「労働者階級」あるいは「中産階級」(むし

ろ「生計のために働く普通のひとびと」というべきであろう) と呼ばれるマジョリティに属すると考えられ、ここからとても到達できない別世界に上流と下流の階級がはっきりと区別されるマイノリティとして存在している、というイメージ(下流はオミットされるケースもあるが)が描かれる。〔ibid: 147-150; Lockwood, 1966: 260-261〕ほとんどのひとが、金銭を基準に同じ「中」に属するという中太りの社会イメージが描かれるのであり、このようにして自分たちが意味的に構成した「中」カテゴリーに自分が属すると認識することが、ひとびとの自尊心の確保につながっていく。<sup>(15)</sup>

こうして、「ゆたかな」労働者は、核家族と消費を中心にした私生活主義の生活様式を選びとっており、金銭を基準にする社会のカテゴリーがそのなかで生活世界を再生産するための不可欠な「装置」として組み込まれている。一方で高賃金とゆたかな消費生活、他方での苛酷な労働と地域社会の解体、この状況のなかで生活を支えるのに、彼らはこの生活様式と主観的「装置」を選びとり、これにしがみついたのであって、それが緊要であるほど、そこに「階級」というカテゴリーが登場する可能性はない。<sup>(16)</sup>  
「金銭」という基準によって彼らのように社会をみるかぎり、そこには明確な区別や対立は(権力的な、あるいは威信の差でさえ)存在しないのであり〔ibid:261; Goldthorpe et al., 1969:153〕、運動や変革を志向する「階級」カテゴリーは、彼らの生活の中心である「家庭」や「消費」の場面では出会うことのできないものなのである。〔ibid:155〕<sup>(17)</sup>

#### 4. 「階級」カテゴリーの構成

以上の3つのタイプに対して、客観的「階級」

に対応するマルクス派的な「階級」を主観的カテゴリーとして構成する場合はいかなるものであろうか。私は「社会イメージ」研究とイギリス社会のいわゆる「伝統的労働者階級コミュニティ」のモノグラフを参照しながら、これを理念的に描いていこうと思う。ここでの労働者は「伝統的プロレタリア型労働者タイプ traditional proletarian worker type」〔Lockwood, 1966: 250〕と呼べるものである。彼らにとって「階級」カテゴリーは、いかなる状況のもとで、いかなる生活様式のなかに、生活世界を再生産する「装置」として組み込まれているのであろうか。

#### (1) 労働現場の状況と労働への志向

まず、この労働者が生きている労働現場を描いておこう。典型的と想定されているのは、鉱山や造船といった古くからあり、変動をあまり被っていない第二次産業である。先に述べた「服従型労働者」を生むのと同じ「伝統的」な産業状況なのだが、小規模な企業のなかで雇用者やノンマニュアルと直接接する機会が多いというのではなく、大規模な企業で人格的な接触をほとんどもたない状況が想定されるのだ。

〔ibid:249-250〕

この状況で、彼らの労働への志向はいかなるものになるのか。まず、「ゆたかな労働者」のように金銭的に酬われはしないため、「手段的志向」をとることはできない。同時に、中産階級タイプのように上昇可能な状況で能力主義的なキャリア志向から労働を生活の中心とすることもできない。彼らにとって労働は、たんなる手段ではなく、「官僚的志向」とも違った形で、表出的・情緒的欲求を満たし生活の中心になりうるようなものである。そこで労働への自我包絡は強い。〔Goldthorpe et al., 1968a:41〕

この志向は、ふたつの要因に由来すると思わ

れる。第一に、労働そのものの内容にかかわる。すなわち、「男の仕事」をしているという誇り〔Lockwood, 1966:251〕、この仕事ができるのは肉体的な能力がある俺たちだけであり、職場をきりまわしているのはからだを動かしている俺たちだという自尊心、自負心にある。逆に、彼らは、精神労働は「ペン先だけで現実にはなにも生み出さないまやかしごと」だと考えてその価値を認めず、男らしく実際にもを生む肉体労働により高い価値を与える独自の労働観をもっているのである。〔Willis, 1977=84:296-300〕

第二の要因は、移動が少なく長年同じメンバーの職場で形成される親密な職場集団にある。「男の仕事」を協力してやり遂げるときの仲間意識や役割意識、そこに自然にともなう会話や隠れたインフォーマルな遊びのなかで、社会関係をつくり情緒的な喜びを生む集団活動としての意味を、労働のなかに彼らは見出すのだ。こうして、彼らの労働への志向は「連帯的志向 solidaristic orientation」と呼べるものとなる。〔Goldthorpe et al., 1968a:40-41〕

この志向から、労働疎外や不平等に連帯によって対処していくという様式が生まれてくる（あるいは、不平等に対処するために連帯している、というべきかもしれない）。職場集団は経営・管理から一定の自律性をもっており、仕事のペースを自分たちで決めたり、仲間うちで仕事を融通しあったりしている。〔Lockwood, 1966: 250; Willis, 1977=84:112〕労働組合への参加は、連帯自体を目的に自然になされるのであり、経営・管理側との対決によって労働者の側の生活を集団全体として改善しようとする「連帯的集合性 solidaristic collectivism」として、生活水準を上げるための「手段」以上の位置をしめている。〔ibid:75-76〕こうして、彼らは、共通の利益をもつ仲間、「俺たち」の凝集性を強め、

集団全体で利益を守ろうとするのである。

これは、彼らが労働現場において、利益の対立する「やつら」の存在に気付いていることにも対応する。自分たちの仕事や賃金を最終的なところで決定し、自分たちの生活に影響をおよぼしているものがある。その実体は、自らの世界の外にあるので把握しにくい、ひとびとはこの「外からの権力」に敏感である。〔Lockwood, 1966:251〕「俺たち」に権威や権力を行使する「よそから来る知らないやつ」、「影のようにぼんやりした、だがほとんどの点でも彼らの生活を支配する数の多い力強い集団」、「ボスたち」や日頃接する職長、警官、小役人という「手先」が作り出す「やつら」の世界は、自分たちからなにかをだましとろうとするけっして信用できない世界である。〔Hoggart,1957=73:64-70〕そして、彼らは、この2つの区分は固定していて結びつくことがないと考え、これとの対決によって「俺たち」の集団としての利益を最大にしようとみなしているのである。〔Goldthorpe=Lockwood, 1963: 147; Goldthorpe et al., 1969: 118〕

こうして、労働への連帯的志向とそこでの自己確認、「俺たち」という集合性と「やつら」との対立、これによって伝統的プロレタリア型労働者の労働現場は特徴づけられるであろう。

## (2) コミュニティーとしての地域社会

このような労働現場での志向は、彼らの生活全体の諸条件のなかで可能となっており、それに基づいて生活様式の一部となっていると考えられる。その重要な条件が、この労働者の生きる地域社会の状況であり、そこでの志向である。

彼らの地域社会は「伝統的労働者階級コミュニティ」あるいは「職業コミュニティ occupational community」と呼ばれるものである。ここでは、同じ産業のマニュアルワー

クに従事する同僚のみからなる地域社会が形成され、労働以外の生活にも労働の場での関係や関心、価値が浸透する。〔Salaman,1975:222〕すなわち、連帯的な労働への志向が延長されて、労働外の生活も職場での仲間との連帯、仲間と集団になって余暇を過ごすというパターンを軸とするものとなる。〔Goldthorpe et al., 1968b: 75〕音楽やスポーツをしたり、一緒に酒を飲んだりする「クラブ」が作られており、そこで役割を果たすことが生活の大きな支えとなり〔Jackson, 1968=84:280〕、同僚=隣人という「友だち」との強烈で絶えざる「社交性 sociability」〔ibid:287〕がその特徴なのだ。

このような労働者つまり男性たちとは切り離されて、家庭をまかされている女性にも、この地域社会では「社交性」が開けている。それは、「男には友だちがいる、女には親戚がいる」〔Klein, 1965:139〕と日常的にいわれるほど、親族との関係を中心とするものである。そこで特徴的なのは、主婦とその母のあいだのきわめて強い紐帯である。家庭内では父よりも母と子の結びつきがはるかに強く、子が結婚するときには娘が親元の近くに住むことが多い。そこで、母を中心にしてその娘(姉妹の場合もある)、孫の密接な結びつきができてあがる。〔ibid:185-193〕この「拡大家族 extended family」は、第一に、女性に情緒的な場を提供する。夫を送り出してからの妻の一日は、Mum の家に行って、話をしたり姉妹と会ったり食事したりすることが中心となる。第二に、娘の出産、病気のと看、また経済的不如意のとき、母が、または母の指示のもとに姉妹がその家庭を援助することになる。〔Young=Willmott, 1957:46-56〕夫の提供する収入が不安定であるなかで、安定を保ち孤立と破滅を防ぐにはこの相互扶助がほとんど唯一の装置として不可欠であり、その意味で「拡

大家族は女性によって女性のために組織された労働組合であって、その連帯は孤立に対する防衛策である」といえるだろう。(ibid:187-189)

こうして、労働者コミュニティにおいて、労働者とその妻には情緒的満足と相互扶助が得られることになる。そして、これが、彼らの労働をふくめた生活様式を方向づける生活の軸となっているといえるだろう。親戚がいて相互扶助の可能な労働者コミュニティでは、核家族という単位で物質的水準を確保しようとする必要はないことになるし、それほど出費は多くなく、金が不足することもあまりない。(ibid:140) そのために、将来を計算して金を貯めるのではなく「集団と現在を志向した共生性 a public and present-oriented conviviality」のなかで金と時間とエネルギーを使うことが可能になる。(Lockwood, 1966:251) また、この連帯的志向の余暇の過ごし方のなかで、隣人=同僚によって、また拡大家族によって情緒的満足を与えられるのであれば、物質的水準の上昇に自己確証をもとめて出費するということが不要である。物質の消費に関心を集中せざるをえない「ゆたかな」労働者もつような物質的水準を求める欲求を、抑えることができるのである。

(Goldthorpe et al., 1969:118)

このことが労働への志向にも影響する。コミュニティに社交の満足があるから、能力主義の志向のように労働に自己確証を求めてしがみつ়必要はなく、消費への欲求を低く抑えられるから、「ゆたかな」労働者のように経済的報酬のために労働の質を犠牲にする必要もない。むしろ、経済的報酬をある程度犠牲にしても労働での「連帯」を第一において、労働を集団で一定のペースに統御していくことが可能になるのである。そして、この、労働でえられる連帯の情緒的満足が、また、官僚的志向や手段的志向

をとる必要をなくしているのである。

こうして、伝統的プロレタリア型労働者の地域社会は、仲間集団や親族ネットワークによって相互扶助と情緒的満足がえられるコミュニティとなっている。労働者はこのなかで、現在を志向し、連帯を志向することによって生活を成り立たせる生活様式を作り上げており、これが労働などの他の生活領域にも及んでいるのである。

(3) 「装置」としての二分法=権力モデルの採用

このような生活の過程においてひとびとが構成する社会のイメージは、まず、以下のようなものとして描かれる。社会は「俺たち us」と「やつら them」に二分され、権威や権力をもつ「やつら」が「俺たち」に権力を行使し、支配=搾取することによって成り立っている。「俺たち」は利益をめぐる「やつら」と対立し、その対決のなかで利益を守らなければならない。この「二分法=権力モデル dichotomous power model」(Goldthorpe=Lockwood, 1963: 146) が、労働者と資本家という2つのセクターへと社会を二分して考え、その両者の関係を前者への後者による支配=搾取として把握するマルクス派的な客観的「階級」概念にもっとも近く対応するカテゴリーだと考えてよかろう。

問題は、この「階級」カテゴリーが、彼らの生活様式によって生活世界を再生産するさいにその「装置」としていかに働いているか、ということである。「階級」カテゴリーは、これまでにみた他の3つの社会モデルの「装置」としての働きとどのように異なったメカニズムによって働くのであろうか。これを把握することによって、「階級」カテゴリーの内実そのものを、より明確に描くことができよう。

まず、これまでみてきた伝統的プロレタリア

型労働者の生活様式は、以下のように特徴づけられる。すなわち、「俺たち」がお互いに結びつき、その結びつきによってできることをしなければ生きていけない〔Goldthorpe=Lockwood, 1963:147〕と考え、「生活手段の用意は、生産においても分配においても、集合的で相互的なものになる」〔Williams, 1866=73:268-269〕という生活様式であり、ここでは「他から抜け出そう」とする試みは非難・制限され〔Goldthorpe et al., 1969:119〕、個人的に「自分の階級から逃避したり出世をする」といった「ブルジョワ文化」の生活様式は否定される。〔Williams, 1966=73:268-269〕このような「集合主義」的生活様式を、過酷な労働条件や不安定で低い物質的給付という状況のなかで支えるために、彼らは、労働を統御する職場集団、相互扶助のための労働者コミュニティ、労働者全体の向上をめざす労働組合といった階級的な「集団」を形づくってきたのであった。

つまり、ここでは、「集合主義」的生活様式を支える現実的な基盤が、他の「集団」ではなく「階級」なのであり、「階級」とは、生活上の課題を解決する基盤としての実体を備えたいわば「集団」として形成されるのである。それゆえ、プロレタリア型労働者が主観的に構成する二分法的な「階級」カテゴリーの内実は、「集合主義」的生活様式の基盤として労働者が形づくる「集団」となっているといえよう。そして、このカテゴリーを主観的に構成することは、「俺たち」という「集団」の凝集性を高め、「やつら」と対決する行動様式を強化することになり、この生活様式の現実的な基盤を維持していくための主観的「装置」となっている。

これは、ある基準からみて同じ条件にあるひとびとのたんなる集群を「階級」ととらえるカテゴリー構成とは異なるものである。これまで

みた威信モデルや金銭モデルにおいて、それぞれの「階級」にあたるものはこのようなたんなるカテゴリーであり、これは、前節でみたように、生活世界の再生産にとって不可欠な「装置」となっているとしても、「集団」を指すことまでは組み込まれていない。中産階級タイプは、ひとびとはいまの「階級」（にあたるカテゴリー）からより上の位置に抜け出そうと個人的に努力するわけで、このカテゴリーが生活に必要な「集団」としての基盤を備えている必要はない。彼の生活にとって不可欠なものは能力と努力の主体である自己と、そのなかでキャリアを積み重ねていくべき企業・組織なのである。また、私生活主義の労働者は金銭という基準が同じであればホワイトカラー層までも自分の「階級」（にあたるカテゴリー）に含めるという見方をとってしまい、これも「集団」とはなりえない。彼にとって物質的消費の場である核家族と、それを保証する「手段」としての企業なり、国家経済全体なりが生活のための「集団」なのであって、このカテゴリーはそのような実体を期待されていない。上位者との結びつきを軸に、上位者を含みこんだコミュニティのなかで生きる服従型の労働者にとっても、同じ職業威信をもつひとびと（労働者）の集群が「集団」として存在する必要はまったくないのである。

こうして、「集合主義」的生活様式を選びとったひとびとが、その現実的な基盤となる「集団」として「階級」を形づくるとき、「集団」としての「階級」カテゴリーが構成され、この主観的カテゴリーの構成によって「集団」としての「階級」の存立が支えられ維持され可能になることが、「階級」カテゴリーが生活世界再生産のための主観的「装置」として働く第一のメカニズムとなっている。しかしながら、このカテゴリーの主観的「装置」としての働きはこれだ

けではない。そのもうひとつのメカニズムを、第二に検討しなければならない。

これまでに述べたカテゴリーは、威信、あるいは金銭というひとつの基準によって、社会をヒエラルヒーをなす成層としてイメージするものであった。このような社会の構成において、マニュアル労働者はどうしても自分を下位に位置づけざるをえなくなる。威信モデルでは、威信基準による下位に自分がいることは認めざるをえず、これを、自己の職務が意義あるものだという解釈や、将来必ず上位へと抜け出せるという解釈によって乗り越えた。また、金銭モデルでは、労働者とノンマニュアル層を含み込んだ「中」というカテゴリーを構成することによって乗り越えたわけである。

ところが、二分法的社会モデルをとるならば、あるひとつの基準によって社会を成層ととらえ、そこに自分の位置を序列づけることを拒否することができる。すなわち、「俺たち」と「やつら」を全く別の世界ととらえることができるのであり、そのことによって両者を並列することができる。あるいは、「やつら」とは異なる「俺たち」独自の基準を編み出して「俺たち」を上位に置くことさえ可能になるのである。

これは、たとえば、以下のようにしてなされる。先に触れたように、プロレタリア型労働者の労働観においては、ノンマニュアルの精神労働は何も生み出さない仕事であって、別に能力の証明であるとは考えられず、逆にマニュアルワークこそ能力の証明であり、実際に価値のある仕事だ、ととらえられている。これは、中産階級タイプの威信モデルが前提する、「社会的に劣位」な肉体労働は能力のなさを証明するとする「能力主義」のイデオロギーの基準を否定、あるいは逆転したものである。肉体労働に価値をおくこの全く別の基準によって、彼らは「や

つら」の権威を否定して上位に置かず、逆に「俺たち」の位置に誇りをもつことができる。〔Willis, 1977=84:293〕<sup>(18)</sup>こうして、「最下層にいとみなされる階級や集団のメンバーがいかにして自尊心 self-respect を保つか」〔Young =Willmott, 1960:129〕という課題を、プロレタリア型労働者は「イデオロギー的な上下秩序のどんでん返し」〔Willis, 1977=84:294〕によって解決しているわけだ。<sup>(19)</sup>

そして、二分法によって確保される誇りが、第一にみた「集団」としての「階級」の存続を可能にしているともいえる。「俺たち」と「やつら」は別なのだ、少なくとも「やつら」の下での地位にいるのではない、と考えなければ、今のこの「階級」に留まろうという考えは維持しえず、かりに「集合主義」的な生活様式をとったとしても、その基盤は「階級」以外のものになるだろう。つまり、「集団」として生活上の課題を解決しうるだけでなく、「俺たち」という「階級」が生きるに値するものだという意味付与があってこそ、この「集団」は積極的に保持されるものとなるのであり、二分法がこの意味付与をもたらしているのである。<sup>(20)</sup>

こうして、「集合主義」的な生活様式をとるプロレタリア型労働者にとって「階級」カテゴリーの二分法的社会イメージを採用することは、その生活様式の現実的基盤である「集団」を支え、同時に、彼らとその労働と生活の状況のなかで自尊心と誇りをもって生きるために不可欠なものである。ここにおいても、このカテゴリーは、ひとびとの選りよった生活様式によって生活世界を再生産する過程に組み込まれており、他とは代替がほとんど不可能な「装置」としてひとびとによって主観的に構成されているのである。

## 5. 残された課題——現代における「階級」カテゴリーの可能性

以上のように「社会イメージ」研究の成果を理念的に再構成することによって、私は、本稿の問題に一定の解答を得たと考える。ひとつとが、客観的「階級」概念に対応する「階級」カテゴリーを構成するのはいかなる場合であり、どのようにしてであるのか。また、「階級」カテゴリーを構成せず、他のカテゴリーを構成するのはいかなる場合であり、どのようにしてであるのか。この本稿の問題に、以下のように答えられるだろう。

まず、マルクス派的な「階級」カテゴリーがひとつとに構成されるのは次のような要因が存在する場合である。第一に、ひとつとが、「集合主義」的生活様式によって生活世界を再生産しているという要因である。この「集合主義」的生活様式を支える基盤として、「階級」（労働者という同じ位置にいるひとつと）の形作る現実的な「集団」がなければならない。すなわち、社会的・地域的移動が低いという条件によって存続している職場集団と労働者コミュニティがこれであって、これはその社交と相互扶助を中心にする「連帯」によって労働者に物質的安定と自己確証を与え、生活を支える基盤となっている。

第二に、この「俺たち」の「集団」がその利益を確保して生活の基盤となるには、「やつら」すなわち資本家、経営・管理者を中心とする上位者と対決・敵対しなければならない、という認識が必要である。この認識には、「俺たち」と「やつら」を対等に、ないし「俺たち」を上位におく労働者独自の基準が伴っていないなければならない。この基準によって、労働者は自尊心を確保するとともに、「集団」に留まることを

望ましいことだと考え、第一の要因の基盤たる「集団」を維持することが可能になるのである。このようなふたつの要因のある場合に、労働者は社会を「二分法＝権力モデル」で構成するようになり、この「階級」カテゴリーが生活様式を支える「装置」として生活世界の再生産に組み込まれているのである。

これに対し、「階級」カテゴリーとは異なるカテゴリーが構成され、「階級」カテゴリーが構成されないのは、これらの要因が、そのいずれかの側面から存在しないものとなっている場合である。まず、「中産階級タイプ」においては、社会的な上昇移動の可能性が高いという条件のなかで、労働における個人的な努力によって上昇することを軸に生活を支える（あるいは、必ずしも客観的条件とは対応せずに、上昇できると思い込みこれを支えにする）「個人主義的能力主義」的生活様式が可能になる。この生活様式においてひとつとは個人主義的に努力することで物質的水準と自己確証を確保するのであるから、「集合主義」的に生活を支えることは問題にならなくなり、「階級」という「集団」を形作る必要もなくなる。こうして、高い社会移動という条件が（それはイデオロギーとしてしか存在しない場合もあるが）「集合主義」的生活様式という第一の要因を突き崩すことになる。

「私生活主義労働者タイプ」においては、第一に、地域的移動や職場間の移動によって労働者コミュニティや職場社会が解体しており、ひとつとは「集合主義」的生活様式を現実的に支える基盤を喪失している。第二に、苛酷な労働と引き換えに得られる「ゆたかな」物質的給付によって、家族単位で物質的水準を確保し上昇すること、そこに自己確証を求めることができるようになり、「集合主義」的な相互扶助

や社交にそれを求める必要がなくなる。もちろん、第一の条件によって「集合主義」での物質的安定と自己確証が得られなくなったから、「私生活主義的物質主義」の生活様式にしがみつかざるをえなくなった、ともいえよう。こうして、「集団」の基盤の解体と、物質的給付という別の生活様式の可能性によって、「集合主義」的生活様式はとられなくなり、この第一の要因の不在によって、「階級」カテゴリーは構成されなくなる。

この結果、このふたつのタイプにおいては、それぞれ「ヒエラルヒー＝威信モデル」および「金銭モデル」が構成されることになる。これらのカテゴリーは、ともに、ひとつの基準によって社会を階層化してとらえるものであって労働者独自の基準といえるものではなく、「階級」構成の第二の要因である二分法的な敵対も含まないものとなっている。

これらの現代的な類型に対し、「伝統的服従型労働者タイプ」では、プロレタリア型と類似する「伝統的」な条件が存在する。すなわち、職場やコミュニティでの「集団」が生活の基盤として存在しており、これは社会移動が小さく、労働者への物質的給付も少ない状況では不可欠のものであるといえよう。しかし、この「集団」は職場やコミュニティにおける上位者とともに形成されるものであり、同じ労働者によって形成される「階級」的なものではない。そして、この「集団」を基盤にする服従的な生活様式は上位者との結びつきを中心とするため、上位者と自分たちを別のものだと区別はするが、これと敵対するという要素は含まない。こうして「集団」の基盤が「階級」的なものではないとともに、上位者との敵対という第二の要因が存在しないことになり、ここでも「階級」カテゴリー構成の要因は存在せず、「ヒエラルヒー

＝威信モデル」が構成されることになる。

しかしながら、本稿のこの解答は「一定」のものにとどまるといえるだろう。すなわち、これは、1960年代を中心とするイギリス社会という特殊な一社会を検討した研究に基づくにすぎない。「階級」がひとつひとつについていかなる意味をもつのかを、すべての社会について、あるいは私たちの生きる現代日本社会について検討することは、この解明をもとに、より一般的に考察されねばならない課題なのである。

本稿が検討した社会の特殊性、それはとくに「労働者コミュニティ」というものの存在にあるだろう。これは、「集合主義」的生活様式の現実的な基盤であり、これが存在しない場合に「中産階級タイプ」や「私生活主義労働者タイプ」が登場するのであって、本稿では、「階級」カテゴリーの構成にとって決定的な要因であるとみなされた。しかし、日本社会においては、イギリスのような同一階級コミュニティの存在はほとんど一般的ではなく、また、イギリスでも現代において労働者階級コミュニティをとらえることはかつてほどの重要性を持ちえないといわれている。〔Westergaard, 1975: 255〕とすれば、一般的な課題の考察には、次の問いが不可欠である。すなわち、労働者コミュニティの存在しない状況では、「階級」カテゴリーの構成はまったくありえないのだろうか、その可能性があるとしたらどのようにしてなのだろうか。そこで、私は、最後に、これを、本稿の視座が及ぶ限りにおいて検討し、今後の課題の展開へとつなげておこうと思う。

第一に考えられる可能性は、労働者コミュニティとは別の形態で、「集合主義」的生活様式の現実的な基盤が存在する、あるいは新たに構築、ないし再建されるという事態である。生活全体を包括しうる労働者コミュニティが存

在しない状況で、これの代わりとなって、「集合主義」的生活様式を支えるなんらかの基盤を創出することは、必ずしも不可能ではなく、現代日本においても、さまざまな職場集団や労働組合がこの役割を果たしているといえよう。<sup>(21)</sup>

「階級」が構成されるときには、このような基盤としての「集団」がなんらかの形態で存在するのに成功しているのであり、この存在をそれぞれの社会において描き出すことが、この構成の可能性を探るうえで検討すべき課題なのである。

しかし、それは、「階級」カテゴリーを不要とする他の生活様式がきわめて現実的で安定したものとして多くの労働者に開かれている状況においてなされねばならない。すなわち、現代社会の状況は、個人主義的能力主義や私生活主義的物質主義的生活様式をとることを可能にしており、同時に支配的意味システムによってこれらの生活様式をひとびとに示しつづけている。これらによらず、ひとびとが「集合主義」的生活様式を選びとるには、この「集団」がこれら以上に現実的で安定的に生活を支えるだけの基盤となり、「もうひとつの生活様式」を展開するだけの全体性を備えていなければならない。この状況のなかで、労働者コミュニティとは別の形態の「階級」的「集団」がこれを備えるのは、やはり困難といわざるをえない。たとえば、労働組合という「集団」があるとしても、それが経済的問題のみを扱うならば、労働者はその成果のみを受け入れ、この経済的条件をもとに私生活主義的物質主義的生活様式を展開することになり、かりに経済的「手段」として「階級」というカテゴリーを認識するにしても、その日常生活は「金銭カテゴリー」をめぐってなされるのであり、このカテゴリーのほうがあるかに不可欠、レリヴァントなものとなるだろ

う。<sup>(22)</sup>この「集団」は、「集合主義」的生活様式を展開するだけの基盤を備えようとしていないのである。こうして、現実的基盤としての「集団」という第一の可能性は、この困難な状況のなかで描き出されることになるだろう。

第二に考えられる可能性は、「階級」カテゴリーを内包するイデオロギー的な働きかけによるものである。「集合主義」的な生活様式の現実的な基盤の存立が困難な状況にあって、さまざまなエージェントによる働きかけによってひとびとが「階級」を構成する可能性はどのように見積もられるのだろうか。

そもそも、本稿、および「社会イメージ」研究は、ひとびとが直接の個人的経験から社会イメージや「階級」カテゴリーを構成すると考え、労働現場や地域社会に焦点をおいてきた。しかし、個人が日常生活するなかでの経験・構成を超えた領域がその外に広がっているのであり、ここに存在する社会的知識や集合表象といったものが個人に影響を及ぼすことを考えないわけにはいかない。[Allcorn=Marsh, 1975:214-216]とくに、伝統的地域社会の解体のあと、ひとびとがマス・メディアや大衆組織、国民経済の影響にどんどん晒されるようになっていくとき、直接経験に定位する問題設定でとらえられる範囲は小さくなり、これを超える領域をどう扱うかが課題となるであろう。[Lockwood, 1975: 249]

こうして、これまで本稿でほとんど扱えなかった、ふつうのひとびとの日常生活を超えたさまざまなイデオロギー的主体による現実構成が問題となる。<sup>(23)</sup>これのもつ可能性を検討するには、まず、この現実構成自体の内容と生成過程をとらえることが必要であろう。「階級」というカテゴリーをめぐって、国家のイデオロギー装置や企業が、あるいは社会主義政党や労働組

合が、対立するような現実構成をしている。また、マス・メディアは双方の政治的立場の狭間でさまざまな現実構成をしている。さらに、社会学者などの学的主体は「科学的真理」の名のもとに別のひとつの社会的な現実を構成している。<sup>(24)</sup>ひとつの社会には、ふつうのひとつとの現実構成を含めて、このように多様な「階級」をめぐる現実構成が存在しているのであって、これの一社会における見取り図を提示しなければならない。もちろんこれらはたんに併存するのではなく、互いに影響し、利用し、せめぎあっているものであり、動的な相においてとらえられるべきである。

しかし、この検討課題は本稿の範囲を超えている。本稿の視座から述べるのは、これらの直接経験を超えたさまざまな現実構成の働きかけを、ひとつとがどう受け止めるかであり、「階級」カテゴリー構成の第二の可能性はここにかかっている、ということである。このときも、ひとつとによる構成は、これらの働きかけをたんに受容するものではありえず、主観の能動的作用によってなされるものとして把握されねばならない。すなわち、さまざまなマクロな現実構成、「階級」をめぐるカテゴリーを、あるものは受け入れ、あるものは拒否し、また、あるものは彼らなりの元とは違う意味に解釈がえをして採用し、必ずしも一貫しないアマルガメーションへと再構成しているのである。<sup>(25)</sup>

そして、そのような再構成は、やはり、生活世界を再生産しつづけるという課題を基準としてなされている、と私は考える。すなわち、マクロな現実構成といえども、それが生活を支える「装置」になりうる時にひとつとは採用するのであり、なるようにひとつとは変形するのである。とすれば、「階級」カテゴリーを含むイデオロギー的現実構成は、ひとつとの現在の

生活様式に組み込まれうる要素をもっている場合に、ひとつとに採用されるだろう。ひとつとが、なんらかの形で「集合主義」的生活様式を保っているとき、これは容易であろうと考えられるのだ。

しかし、個人主義的能力主義や私生活主義的物質主義的生活様式をひとつとが享受しているとき、この現実構成はこのような形では組み込まれない。ここでは、イデオロギー的構成自体が、これらの生活様式とはちがう生を支える新たな戦略をひとつとに提示し、ひとつとの生活様式そのものになんらかの変容をもたらすことなしには受け入れられる可能性はないのである。そのために、「集合主義」的生活様式を、他の生活様式と同様、あるいはそれ以上に生活全体を組み立てうる現実的なものとして提示し、この新しい「もうひとつの生活様式」の実現に向かう日常的過程が生活の軸となりうる、というヴィジョンを描きださなければならない。<sup>(26)</sup>いかにラディカルなイデオロギーであれ、いかに「客観的」な利害に対応している現実構成であれ、このような、日常生活を支える生活様式の全体像を備えなければ、ひとつとはそのなかに訴えるものを見出せず、「階級」カテゴリーをその生活のなかに採り入れることはない。<sup>(27)</sup>おそらく、現実的な基盤が存在しない状況でイデオロギー的構成によってひとつの生活様式にひとつとを引きつけること、しかも、他の生活様式がきわめて現実的で魅力的なものとしてひとつとに開かれている状況でそうすることは、きわめて困難であるにちがいない。しかるに、現在において、より現実的で魅力的なイデオロギー的構成を作り出すことにイデオロギー的主体は成功しているとは思えないし、あるいはこの困難な課題自体に気付いていないようにさえ思われる。イデオロギー的な構成を以上のような

な観点から検討することが課題となるわけだが、私は、この第二の可能性も困難なものであると考える。

しかしながら、以上の検討は、イギリス社会を対象にした本稿から引き出されうる限りで展開を図ったものである。このような一般的な課題は、現代の他の多くの社会の研究や、マクロな社会のイデオロギー的構成の研究といった、本稿で果たしえなかった検討によって解明されねばならない。本稿は、ひとつひとつとして「階級」とはなんであるか、という独自の視座から、「階級」についてのいくつかのあらたな論点を提示したといえるだろう。しかし、この問いはまだ問われつづけられなければならないものなのである。

#### 注

- (1) これは、経済的のみならず、政治的、イデオロギー的水準によって階級を決定する N.Poulantzas, E. O.Wright を参考にした定義である。彼らは、この定義から、ある客観的位置がどの階級に属するか構造的に決定されているものとして分類していくわけだ。〔Poulantzas, 1974=75: 13-24; Wright, 1978=86: 27-101〕
- (2) すなわち、生産関係における搾取に基づく敵対的な関係概念としての「階級」概念は、社会構造の他の諸相を説明する位置にある。〔Wright, 1985:26-37〕これに対し、マルクス派以外のさまざまな客観的「階級」概念は社会構造を説明する力を持たず、この「本質」的な「階級」の「現象形態」〔庄司, 1982:25〕を扱っているといえるだろう。たとえば、ウェーバー派は、市場における能力によって同じチャンスを持つ個人の集群を「階級」ととらえ〔市川・千石, 1981:137-138〕、ある属性の量的基準によって社会を区分する階層論への道を開いたが、これは、構造的に決定され

た位置（マルクス派的「階級」）に誰が配置されるかをとらえたにすぎず、構造的位置に従属せざるをえないものである。〔Poulantzas, 1974=75:28-29〕つまり、段階的不平等をマルクス派的「階級」によって説明はできるが、その逆は不可能なのである。〔Wright, 1985:35〕また、デュルケーム派 (M.Halbwachs および G.Gurvitch) は、集合表象 (=階級意識) をもった「集団」としてのみ「階級」が存在すると思うが〔Gurvitch, 1954=59:9, 172-173〕、これは「集団」としての定義を越えられず、経済的な階級利害という「本質」との関係さえ見失ったものとなっている。〔八木, 1978:53, 55〕こうして、本稿ではマルクス派の概念を、「階級」の「本質」を把握した「客観的な『階級』概念」として採用することにする。

- (3) 社会科学者のもつ「階級」概念を、「客観的」あるいは科学的・二次的構成概念、日常的なひとつひとつのそれを「主観的」あるいは日常的・一次的構成概念と呼べるであろう。このふたつを同等に扱い、「主観的」構成概念として「階級」を把握しようとする本稿の問題意識は、現象学的観点に発している。〔Schutz, 1962:6〕
- (4) Marx が生きた 19 世紀半ばは、生産手段の非所有と「貧困」や「悲惨さ」が一致しており〔Przeworski, 1985:55-56〕、労働者の搾取という客観的な「階級」関係の論理によって労働者は自然にその歴史的使命を自覚すると考えられた。〔ibid:52; Benson, 1978:24〕それゆえに、彼は、客観的な搾取関係の存在と革命的な階級意識の存在というふたつの現象を区別せず、少なくとも後者の条件を精査することはなかったといえるだろう。〔Giddens, 1973=77:89-90〕このアプリアリズムと楽観論は、客観的「階級」（もちろん別の定義であるが）が主観的ゲマインシャフトになる条件を「あるがまま」追求しようとした Weber の批判の対象になり〔ibid:35, 75; Benson, 1978:30, 52;〕

市川・千石, 1981:141)、デュルケム派には「階級」にかんする集合心理学がないと批判されている。(Gurvitch, 1954=59:104)彼が、自分の時代の特殊な状況を一般化したという批判 (Dahrendorf, 1959=64:194) に対処するためにも、このアブリオリズムを乗り越えねばならないのである。

(5) この条件をめぐってマルクス派はいくつかの理論的展開をしてきた。Poulantzas は構造的に決定される階級的位置と具体的な情勢のなかで生まれる階級の立場のズレを論じ (Poulantzas, 1974=75:14-17)、A.Przeworski は「階級をめぐる闘争」のなかで階級が組織化、解体化、再組織化されると論じ (Przeworski, 1985:47-97)、Wright は階級の構造的・組織的力量とそれによる階級形成を論じている。(Wright, 1978=86:102-115) 本稿の検討は、この条件のひとつを把握するものとして、この問題設定のなかにあり、とくにそのイデオロギイ的条件を扱っているものとも考えることもできよう。ただし、マルクス派のこの伝統は、社会構成体をマクロにとらえる視座からイデオロギイ的水準を扱うもの (注(23)でいう「ヘゲモニー的構成」を扱うもの) であって、本稿のような、「階級」そのもののひとつひとつについての意味を問うたり、これがひとつひとつの側から構成されるととらえる観点や、以下で述べるような形でこれを生活のミクロな過程に位置づけ、ひとつひとつの生きる全現実構成のなかで扱おうとする視座を展開しうる枠組を備えているとは思えない。

(6) この伝統 (および、これを踏まえた「ゆたかな労働者」研究) は、産業労働研究において状況定義や生活史的要因を重視した主観的・解釈的立場の可能性を開いたものと評価されており、その立場の不徹底さという限界をもつものの、それを突き詰めていけばエスノメソドロジーや現象学にきわめて近似してくるといわれている。〔大山, 1988:353-355〕 本稿の問題意識 (注(3)参照) に、

これは近いものであり、これを私なりに以下で展開して、再構成しようというのだ。

(7) ここでいう「生活世界」とは、私が E.Husserl の概念を解釈したものである。これは、日常的にひとつひとつによって意味構成される「日常生活の世界」(これが A.Schutz のいう「生活世界」である) を基礎づける、世界に志向性を差し向けてよいと確認する自明性の世界を指す。すなわち、意味構成のみならず物質的再生産 (労働) をふくむ人間の営みを、より深層で支え、可能にする、世界と人間との根源的な関係の層を指す。この基盤が破壊されるとき人間は具体的な営みをなしえず、これは人間が生きていくためには絶えず再生産されねばならない。それゆえ、人間の営みは、その基盤である「生活世界」を再生産する過程としての相をもたざるをえないのである。〔奥村, 1989:37-39, 44-46〕

(8) 従来のアンケートによる調査は、対象者を非日常的な状況におくとともに、日頃対象者が思いつきもしないかもしれない「上-中-下」や「資本家階級-労働者階級」といったカテゴリー (もちろん思いついている可能性もあるが、その可能性自体は測定できない) を科学者が用意して、そのなかから選ばせるというものであろう。そこでは、日常的に抱いていないカテゴリーを対象者が選べとらされ、それをあたかも日常いただいているかのように結果が議論される。問題は、この用意されたカテゴリー群のなかからどれを選ぶかではなく、「上-中-下」なり「資本家階級-労働者階級」なりのどの枠組を対象者が日頃抱いているかにある。おそらく、既にある用意された枠組のなかで対象者に選択させようとするアンケートは「社会学者たちが人民の意識ではなくて自分たちの意識を計測している」〔Braverman, 1974=78:30〕 と批判されてしかるべきものであろう。対象者自身の「階級」カテゴリーを把握するには、あらかじめ

めカテゴリーを用意してはならず〔Goldthorpe=Lockwood, 1963:143〕、きわめて慎重で「自然な会話の流れにそった」インタビューを工夫するしかないであろう。〔Goldthorpe et al., 1969:200-202〕

- (9) このような社会モデルは現存の社会がその不平等を、道徳的にも正当で望ましいものとして承認させ正統化する「支配的意味システム dominant meaning-system」といえるだろう。この場合、この意味システムは上位階級と下位階級のパーソナルな接触のなかで内面化されたものである。〔Parkin, 1971:83-84〕
- (10) この「支配的意味システム」は、教育制度などによってひとびとにもたらされている。〔Parkin, 1971: 64〕
- (11) この「能力主義的平等主義 meritocratic egalitarianism」とも呼べる社会観は、個人的達成の報酬として上昇を強調するが、同時に不平等は能力と努力の結果なのであってそれが構造的に存在するのは当然とみなすのであり〔Benson, 1978:44, 121〕、上昇できないのは道徳的欠点を証明する失敗〔Parkin, 1971:68〕、能力と努力の欠如によるものだと考えられることになる。この論理は、高いアスピレーションを持ちながら下位にとどまっているひとびとの緊張をまねくことがあるが、それとて個人の責任に還元できるのであり、とくにその緊張が犯罪や疾病という「病的」な現象として現れるときには、それを「個人の問題」として処理する装置は整っているといえるだろう。〔ibid:68〕
- (12) M.Mannによれば、資本主義社会では労働と非労働の領域が切り離され、労働運動のなかでは経済的報酬と労働の統制という目標が切り離されている。〔Mann, 1973:19-20〕経営者は労働者による統制よりも経済的バーゲニングにより柔軟に対応し、これに対応して労働組合も経済主義 econo-

mismの方向をとる。〔ibid:21, 32〕こうして労働者は、経済的報酬とひきかえに生産現場で部分的に疎外された状況で、このふたつを切り離す「二元的な意識 dualistic consciousness」を発展させるのである。〔ibid:33〕

- (13) この、地域から孤立した家庭に、テレビが「家の外に快適さがなくなったのを補償し、孤立した家族を支えるのに役立つ」不可欠なものとして入り込む。〔Young=Willmott, 1957:43〕マス・メディアの侵入が、さらに「より積極的な、より充実した、もっと協同で楽しむ種類の娯楽」を「しだいにほし上げていく」のであり、コミュニティーはさらに解体を進める。〔Hoggart, 1957=74:265〕そして、この水路をとおして、ひとびとに、以下のような高度な消費を理想とする広告メッセージが注入される。
- (14) 現代資本主義の生産力は、労働者を主要な消費者として包摂することなしには捌け口を見出せない水準に達している。一方で高賃金政策を採用し、他方で耐久消費財をはじめとする資本主義的商品によって、従来商品の消費以外のやりかたで処理していた生活領域を置き換えていくことが、消費財市場の拡大、それによる資本蓄積には不可欠である（いわゆるフォード主義による内包的蓄積体制である）。〔水島, 1983: 上107-111〕これが、新製品の開発による買い替えや先に述べたマス・メディアによる広告〔O'Connor, 1984=88: 107-113〕によって促進されているのが現代の消費社会である。そして、ここでは労働者は、商品の消費という一定の形で労働力を再生産しているため生産過程に適合的であり、高賃金を求めて労働に励まざるをえないため、生産性も確保できる。〔成瀬, 1988:35-36〕このマクロな構造のなかに、このような労働者の家庭と地域社会があるのである。
- (15) ひとびとが「階級」という「ことば」を用いても、それは、もちろん本稿で用いている客観的カ

テゴリーと対応する「階級」カテゴリーと一致するとは限らない（本稿では、このような不一致の場合は「階級」カテゴリーの非構成と分類しているわけだ）。また、「中」というカテゴリーも、ここで述べたように、社会科学者の構成する「中」概念と一致するものではなく、ひとびとの主観的解釈によって、基準・分類の科学性よりも「装置」としての役割を果たすように構成されたものである。こうして、ひとびとの用いる「ことば」の背後に、いかなる独自の意味解釈が潜んでいるかをとらえねばならず、これが科学的構成概念と一致すると短絡的に前提してはならない。（注(8)参照）

(16) これは、「ゆたかな」マニュアル労働者にとってのみえることではない。現代において、事務や販売のノンマニュアル労働者は、かつての「中産階級」としての地位からマージナル化しており、個人としての昇進は望めなくなっている。

〔Benson, 1978:106〕それゆえ、下層の中産階級は個人主義的な志向を捨て、威信の昇進よりも物質的水準を目的とするようになる。こうして、「新しい中産階級」と「ゆたかな労働者」が類似したタイプに収斂するのであって、労働者が一方的に中産階級タイプに同化するのではない、というのが「ゆたかな労働者」研究の結論である。〔Goldthorpe=Lockwood, 1963:151-153〕

(17) 彼らのアスピレーションは、威信のある地位への上昇を求めて「個人的」に努力するのではなく、消費水準の上昇を求めるのに〔Goldthorpe et al., 1969:150〕「集団的」な上昇を望んでいると考えてもよからう。〔Goldthorpe et al., 1968a:136-138〕しかし、ここで「集団的」とは、彼らのゆたかさが経済成長の継続によるものであり、その今後の持続を楽観的に望むという受動的、自動的なものである。〔Goldthorpe et al., 1969:153-154〕仮に「労働組合」という「集団」に参加するとしても、それは企業や国全体との交渉、関係のなかで自分

の賃金を上げてくれるからなのであって、そのひとつの手段にすぎない「手段的集合性」としてであり（企業や国も同等の手段的集合性であると考えてよからう）、けっして現存の秩序を変えようとする志向は含まれていない。〔Goldthorpe et al., 1968a: 106; 1968b:28-31; 1969:154〕

(18) もし仮に、職業の序列づけをするならば、「能力」という基準ではなく「社会的貢献」という基準によることが多い。こうすれば、社長や公務員より農夫や炭鉱夫のほうが「社会のためになる」と高くランキングされ、マニュアル労働者という自分の職業も高い位置におくことができるであろう。〔Young=Willmott, 1956:339-343〕

(19) この「主観的装置」をもつがゆえに、彼らは、中産階級のモデルからみれば、社会的に劣位、肉体的に過酷、物質的に低収なランクの低い労働・部署を、能力的に劣ったものとみなさず、むしろ、それこそ誇りをもって「みずから選びとる」ことになる。このことによって、支配的意味システムのなかにいるひとびとは安んじて精神労働をする「優位」な部署を獲得でき、優越感と高い報酬を獲得することができる。だから「これこそが、資本制社会の安定を保つ、意外の要因のひとつなのである」ということができる。〔Willis, 1977=84: 293〕このような、ひとびとのミクロな現実構成作用と、社会のマクロな客観的存立との論理的関係は、さらに検討を要する重要な課題である。

(20) 逆にこの「集団」が存在していなければ、二分法的認識や労働者独自の基準を維持することはきわめて困難であるだろう。さきにのべた威信という基準をそなえた能力主義や消費を支えに生活を組み立てさせる私生活主義という資本主義社会の「支配的意味システム」は、社会構造に組み込まれている優位さをもって労働者に押しつけられる。この働きかけのさなかで独自の基準を守るには、逸脱的な意味システムをまもる規範のサブ・シス

テムがなくてはならない。プロレタリア型労働者の場合、それは、職場集団と労働者コミュニティであり、この「シールド」が壊れると（労働者という経済的位置にもかかわらず）保守党への投票が多くなる。〔Parkin, 1967:278-290〕 具体的にいうと、「集団」内部での社交がマス・メディア以上の楽しみを作りだしていれば、「マス・メディアの衝撃は僅少」〔Jackson, 1968=84:275〕で、テレビの普及率が低い〔Young=Willmott, 1957:143〕という事態を生んで、独自の基準を保護することができる。まことに、「集団」が存続するかぎり、「印刷されたポスターにしろ、テレビ・スクリーンにしろ、それらが、労働者階級受け手にとって中産階級受け手にとってと全く同じ『リアリティ』を持っているとは確信できない」〔Jackson, 1968=84:297-298〕のである。

- (21) この事例は「動労の庫コミュニティ」〔稲上, 1981:277-349〕や、「労働者文化」を備えた「少数派組合」〔河西, 1981:325-429〕などにみられる。
- (22) 私生活主義労働者の労働組合とのこのような関係については、注(12)(17)を参照。
- (23) 誤解をおそれずにいえば、このような領域は、ひとびとに影響を及ぼし指導していこうとするものであり、いわば「『階級』のヘゲモニー的構成」とも呼べるものであろう。これに対し「社会イメージ」研究が重視し、本稿が検討してきたのは、ひとびとが自分なりの方法で構成する「『階級』のエスノメソドロジ的構成」とも呼べる領域である。
- (24) 「学的」な営為は、なんらかの形で他のヘゲモニー的構成に利用されたり、ひとびとに伝達されることによって、新たな社会的現実をつくりだす。とくに、アンケート調査の公表という営為は、ひとびとに（日常的に用いたことがないかもしれない）「上-中-下」という分類法を教えるという効果をもったり、「ひとびとの実際の意識」(それが注(8)(15)でみたような問題を含むものであっても)を発表すること

で、たとえば、「中」意識が多いという社会的現実を作りだし、ひとびとにそれを認知させてその現実構成に大きな影響を与えることになる。

- (25) F.Parkin は、労働者の社会への見方は、支配的イデオロギー装置・労働者コミュニティ・社会主義政党という制度的源泉に晒されているため、そこから流れこむ支配的・従属的・ラディカルという3つの価値システムがさまざまな程度で共存、混合している、と考える。そして、それゆえ、ひとつの価値システムが想定しうるような厳密な知的一貫性を持つと考えるのは実際的ではない、という。〔Parkin, 1971:98〕
- (26) たとえば、O.Lewis が述べたキューバの事例がこれを備えている。社会主義とその指導者に対する信頼、未来にはよりましな生活が待っているという希望、下層階級こそ人類の希望だと教えられることによる自尊心、これらがひとびとにとって望ましい社会的アイデンティティの源泉となっている。〔Lewis, 1966=71:(1)38-40; Parkin, 1971:97-98〕
- (27) 労働者コミュニティにおけるプロレタリア型労働者の「階級」カテゴリーは、貧困や不安定や収奪といった状況において「生活を生きるものにする営み the business simply of making life liveable」〔Westergaard, 1975:254〕であり、「適応的 accomadative」な役割を果たさなければならないので〔Parkin, 1971:88〕、日常生活を越えてオルタナティブなヴィジョンに発展するのは困難である、といわれる。しかし、ここで問題なのは、逆に、たとえば社会主義というラディカルでオルタナティブなイデオロギーが、日常において「生活を生きるもの」にし、ひとびとがなんとか「適応」していただくものを持ち合わせているかどうかである。

\*本稿は、文部省科学研究費補助金（奨励研究（A））の援助を受けたものである。

## 参考文献

- Allcorn, D.H.=Marsh, C.M. 1975 "Occupation Communities – Communities of What?" in Bulmer(ed.) 1975
- Benson, L. 1978 *Proletarians and Parties*, Tavistock
- Bott, E. 1957 *Family and Social Network*, Tavistock
- Braverman, H. 1974=78 (富沢賢治訳)『労働と独占資本』岩波書店
- Bulmer, M. 1975 "Introduction" in Bulmer(ed.) 1975
- (ed.) 1975 *Working-Class Images of Society*, Routledge & Kegan Paul
- Giddens, A. 1973=77 (市川統洋訳)『先進社会の階級構造』みすず書房
- Dahrendorf, R. 1959=64 (富永健一訳)『産業社会における階級と階級闘争』ダイヤモンド社
- Goldthorpe, J.H.=Lockwood,D. 1963 "Affluence and the British Class Structure" *Sociological Review* vol.11
- Goldthorpe,J.H.=Lockwood,D.=Bechhofer,F.=Platt,J.1968a *The Affluent Worker : Industrial Attitudes and Behaviour*, Cambridge UP
- 1968b *The Affluent Worker : Political Attitudes and Behaviour*, Cambridge UP
- 1969 *The Affluent Worker in the Class Structure*, Cambridge UP
- Gurvitch, G. 1954=59 (佐々木光訳)『社会階級論』誠信書房
- Hoggart, R. 1957=74 (香内三郎訳)『読み書き能力の効用』晶文社
- 市川統洋・千石好郎 1981 「階級学説」安田三郎他編『基礎社会学第IV巻 社会構造』東洋経済新報社所収
- 稲上毅 1981 『労使関係の社会学』東京大学出版会
- Jackson, B. 1968=84 (大石俊一訳)『コミュニティ』晶文社
- 河西宏祐 1981 『企業別組合の実態』日本評論社
- Klein, J. 1965 *Samples from English Cultures*, Routledge & Kegan Paul
- Lewis, O. 1966=71 (行方昭夫・上島健吉訳)『ラ・ビーダ』みすず書房
- Lockwood, D. 1966 "Sources of Variation in Working-class Images of Society" *Sociological Review* vol.14
- 1975 "In Search of Traditional Worker" in Bulmer(ed.) 1975
- Mann, M. 1973 *Consciousness and Action among the Western Working Class*, Macmillan
- 水島茂樹 1983 「労働者の生活様式と資本蓄積の体制」『経済評論』32-4,5
- 成瀬龍夫 1988 『生活様式の経済理論』御茶の水書房
- O'Connor, J. 1984=88 (佐々木雅幸他訳)『経済危機とアメリカ社会』御茶の水書房
- 奥村隆 1989 「社会科学における『生活世界』の概念とその射程」『社会学評論』39-4
- 大山信義 1988 『船の職場史』御茶の水書房
- Parkin, F. 1967 "Working-class Conservatives:a theory of political deviance" *British Journal of Sociology* vol.18
- 1971 *Class Inequality and Political Order*, Granada
- Poulantzas, N. 1974=75 *Classes in Contemporary Capitalism*, NLB
- Przeworski, A. 1985 *Capitalism and Social Democracy*, Cambridge UP
- Salaman, G. 1975 "Occupation, Community and Consciousness" in Bulmer(ed.) 1975

- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Nijhoff
- 庄司 興吉 1982 「現代日本の階級と社会意識」『社会学評論』33-2
- Westergaard, J.H. 1975 "Radical Class Consciousness: A Comment" in Bulmer(ed.) 1975
- Williams, R. 1966=73 (若松繁信・長谷川光昭訳)『文化と社会』ミネルヴァ書房
- Willis, P. 1977=85 (熊沢誠・山田潤訳)『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房
- Wright, E.O. 1978=86 (江川潤訳)『階級・危機・国家』中央大学出版部
- 1985 *Classes*, Verso
- 八木 正 1978 『社会学的階級論の構造』恒星社厚生閣
- Young, M.=Willmott, P. 1956 "Social Grading by Manual Workers" *British Journal of Sociology* vol.7
- 1957 *Family and Kinship in East London*, Pelican Books
- 1960 *Family and Class in a London Suburb*, Routledge & Kegan Paul

(おくむら たかし)